江戸時代の絵から読み解く
大名行列

越谷市郷土研究会
2013年1月27日

南部藩

- 南部(盛岡)藩20万石
- 戦国以来の旧族大名南部氏が藩主
- 天正18年(1590)南部信直が豊臣氏から安堵
- 寛永11年(1634)10万石と確定
- 寛文4年(1664)八戸藩2万石を分知
- 天和3年(1683)新田を加えて10万石に高直し
- 文化5年(1808)蝦夷地警衛により20万石に高直し

大名の歴史的分類

旧族大名　　居付・移転
織豊取立大名
徳川取立大名　武功取立・新規取立

南部藩の参勤交代

- 参勤人数は近世中期に5~600人、後期に300人程度
- 参勤の時期は3月、帰国は5月が原則
- 盛岡から江戸まで139里、宿次91
- 街道筋の宿駅は伝馬100疋・人足50人を用意
- 奥州街道の宿駅は25疋・25人を常備…助郷で補完
- 南部藩は12日振り(11泊12日)が原則
- 鬼柳ー一関ー古川ー国分町ー白石ー八丁目ー須賀川ー芦野ー喜連川ー小金井ー杉戸に宿泊
- ただし9月から2月は13日振り…文政5年(1822)から
- 文政8年に15日振りの計画も策定…越谷宿泊の予定
- 白河以南の奥州街道を利用した大名は37家

南部藩参勤交代図巻

- 近世後期、盛岡を出立する姿を描いた図巻
- 大名行列図巻は、大半が近代に成立
- 近世に描かれ、行列の基本が最もよく示されている図巻の一つとして貴重

  太田稔氏所蔵　現在岩手県立博物館保管
  天地28cm　長さ29.2mまたは31m
- 製作年代は天保2年(1831)以降か(工藤利悦氏)

  先箱に革覆いがなく金紋
  天保2年、藩主南部利済(としただ)が少将に任官
  同年革覆なしの金紋先箱使用が許可

南部藩の武家人口

寛政二年(一七九〇)「雑書」『岩手県史』五巻

侍身廻
一一万二千四百七拾八人
内 男六千三百拾八人
女六千百六拾人

侍召仕
一八千四百拾人
内 男五千二百四拾一人
女三千百六拾九人

徒
一四百六拾二人
内 男二百三拾九人
女二百二拾三人

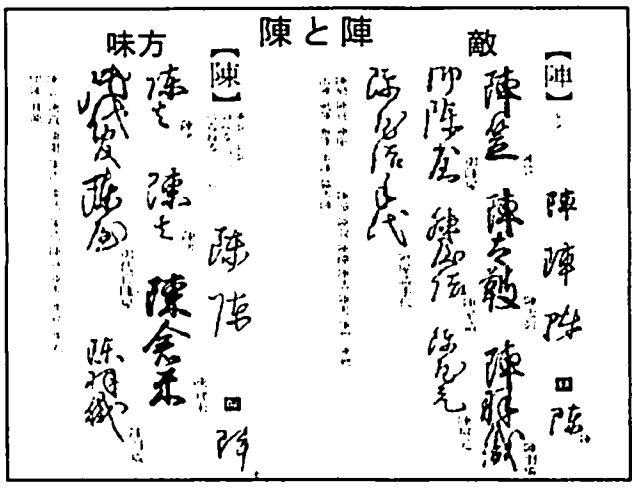
足軽・掃除坊主共
一六千四百八拾三人
内 男三千二百七拾一人
女三千二百拾一人

長柄・小道具・鷲籠・馬附・台所共
一六百五拾四人
内 男五百四拾三人
女百拾一人

中間(仲間)の衣服

仲間は多くは看版を着す、草履取、傘持等は看板に五所の紋を染出す、色は黒又は紺なり、その丈け長く、裾は前より取りて脇にて帯に挟み、袂の端を後ろに頸さず、これを巻端折という、本式なり、看版は通常、冬は木綿袷(綿入もあり、夏は麻単なり、万石以下にては仲間に木刀を帯せしむ、木刀は樫にて作り、鍔・縁・頭・胴・金具・小尻とも、真鍮又は銅を用いたり、鎗持は双刀を帯し、そのほかは一刀を帯す、又万石以上にて諸代等の人は仲間に木刀を帯せしむる向あり、草履取、傘持等は平日草履を用い、その他の下供は皆草鞋をはきたり、昇丁、俗に陸尺という、又看版を着す、紋付なり、

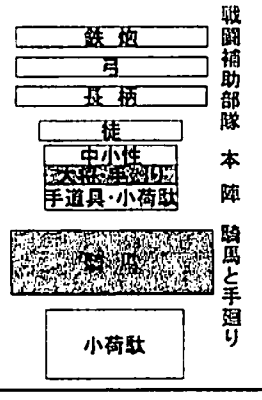
（市岡正一『偽川盛世録』一八八九年刊）



近世武家の行列の基本

- 人数 650人　馬 29疋　鑓64本　鉄炮38挺　弓23張
- 近世の軍隊の形式が基本
  足軽(鉄炮・弓)　鑓(中間)　本陣　騎馬隊　小荷駄
- さまざまな装飾で「武威」を誇る
  装飾品の多くは武器
- 参加者は、行列の位置と衣装により身分や役割が決定
  士分　中小性　歩行　足軽　長柄・中間　陪臣
- 重層的な構成で、行列の中に小行列
  家来が又家来=陪臣(若党・奉公人)を引率して大規模
  身分により小行列の規模に格差
  行列を構成できる者が士分=一人前の武士・上級武士

押(行平)と備(陣形)の基本



1 先頭の戦闘補助部隊
- 鉄炮・弓 …… 足軽
- 長柄 …… 中間

2 本陣
- 徒 …… 歩兵・本陣の守護
- 中小性 …… 歩兵・主君の警固
  目見得以上
- 大将と側近・手廻り
- 道具と小荷駄

3 騎馬隊 ……本格的な戦闘部隊
- 騎馬の武士とその家来・手廻り
  馬のみの騎兵隊とは異なる

4 小荷駄 …… 輸送部隊・夫役

描かれた身分の差

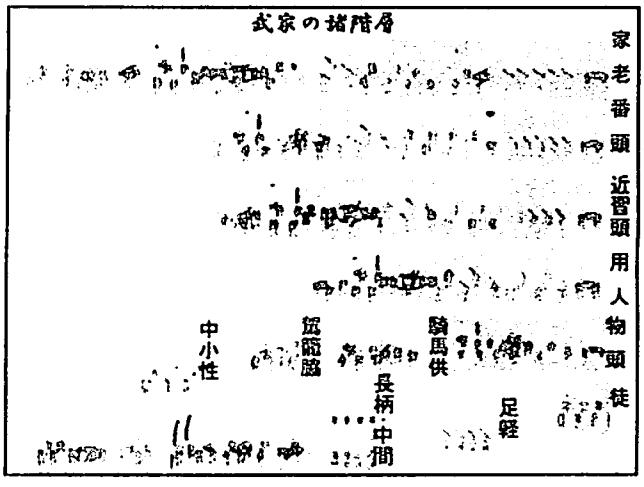
駕籠供 3　騎馬供 17　士分 18　中小性21　歩行 31
足軽 61　長柄・中間 152　　他医師 6
侍・若党 112　又中間 228

士分以上が侍・若党・又中間を持つ
- 中小性以上　目見得以上　10%
  中小性は、徒歩で家来は持たないが、目見得以上
  服装を見ると刀に柄袋、歩行は柄袋がない
- 歩行　5%　足軽　10%　長柄・中間　23%
- 侍・若党　17%　又中間　35%
  行列の構成員の大半は藩主の顔も知らない
  目見得以下の下層武士・奉公人・陪臣層

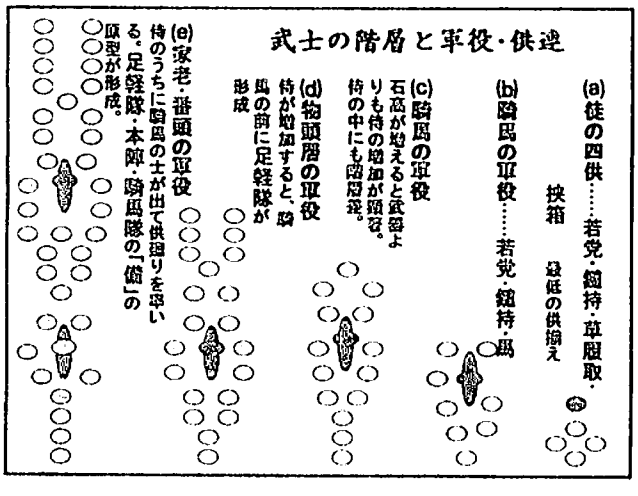
行列の構成

計	備・騎馬隊 御厩部	番頭	騎馬供	家老	具足部	近習頭	用人	本陣 同勢	道具小荷駄	陣奉行	先供	鼻馬道具	先陣 長柄	先手弓	先手鉄砲	
10	3				1	3	1	1			1					徒
17		1	10								(3)		1	1	1	騎馬
18											18			0		士分
21									1	2	18			0		中小性
31									3		20	8		0		徒
61	2							2	3		8	7		17	22	足軽
152									59	4	10	52	10	4	4	中間
112		22	20	23		19	11	3						7	7	若党
228	18	10	50	22	18	15	13	72						5	5	中間
650	23	33	80	46	21	35	25	77	66	28	58	67	20	34	38	計
29		1	10	1		1	1	3	4			5	1	1	1	馬
64		2	10	3		1	1	21	2		2	4	16	1	1	鉄砲
38		5		5		3						5			20	鉄砲
22		1		1		1	1				1	2		15		弓

武家の諸階層



武士の階層と軍役・供連



武家の階層と格式

幕府・諸大名の家臣団の階層はほぼ同じ、軍事上の役割が基本
他に由緒(一門・譜代・外様など)、座格なども加わる

1 備えを持つ……家が軍団になりうる=家老・番頭
幕府では大名、大藩ではこれを編成し大組・寄組・人持組・侍組

2 馬上で供揃を持つ……給人・知行取・馬廻
彼らを編成したのが番組、大番・小性組など、番頭が統率
ここまでが馬上、上級家臣として役方では奉行・物頭

3 給人に準じるが徒歩……中小性・小十人　ここまでが「目見得」層

4 徒歩だが供揃を持つ層……歩行・徒・徒士
多くは徒歩の鉄組に編成

5 最下層の武士……武器は自身で持つ……足軽・同心
これを編成すると足軽隊(先手・持組)、物頭(省頭・武頭)が統率
行列のなかでもその位置と供揃えの規模により階層が決定

武家の階層と俸禄・武具

階層	目見得	俸禄 知行(石)	俸禄 蔵米切米(俵)	俸禄 扶持(人扶持)	俸禄 金銀(両・匁)	馬具	武具
給人・馬廻	以上					馬上	持鑓
中小性	以上					徒	持鑓
歩行・徒	以下					歩	鉄砲・弓
足軽・同心	以下					歩	鉄砲・弓
		領主	内の者	労働の代償 一時的手当			

江戸幕府の認識していた武士の階層

明暦三年(一六五七)十二月

覚

一 跡々より牢人宿借申候、于今其牢人ニ宿借置申候ハヽ、何方之牢人并知行取・中小性・歩行之者迄も逆修盤、奇付を以両御番所遂家主・五人組・宿主参、御役ニ付可申候、右之浪人有付候ハヽ、何方江有付申候と其段御役ニ付可申候、頃日宿借申候ハヽ、前方之宿主と只今之宿主并家主・五人組同道仕、御役ニ付可申事、

一 前々より被仰付候通、若町中ニ手負候者なと於有之ハヽ、早々御番所江可申上候、勿論一夜之宿も借申間敷事、

十二月

(『江戸町触集成』一巻、一八七)

行列の意味

- 見せる行列　権力の強大さと威儀を見せつける
  「武威」の象徴
- 見られる行列　見物され、他と比較される
  見世物としての行列
- 参加する行列　行列のなかでどの位置にいるか、どのような衣装かで身分・階層を示す
- 動員する行列　行列のために、参加者以外の領内・沿道のさまざまな階層が動員される
  宿場・助郷村・渡し場・関所

「兵営国家」　軍隊＝武家のために諸階層が動員
行列は武家の階層を表現

忍藩阿部氏の江戸市中供連れと渡り者

宝暦期（一七五一～六三）

一拾万石以上御供連、士分廿弐人ニ不可過と数々御達有之、宝暦年中御供連左之通、

（中略）

支配方人高之覚

一組頭　八両高　三人
一御徒目付　六両高　九人
一八人者　六両高　六人
一御普代御徒士　五両高　拾五人
一御表渡御徒士　拾八人　内町役壱人
一麻布渡御徒士　拾人　内町役壱人
都合　六拾壱人
一押足軽　八人　部屋頭壱人
一若殿様押足軽　五人
一御表御陣尺御手廻り之覚
一御六尺拾壱人　八人渡り者　三人御国者　内部屋頭壱人

（中略）

一御鑓持六人　内壱人部屋頭　渡り者
一御挟箱持六人　内壱人部屋頭　渡り者
一御草り取四人　内壱人部屋頭　渡り者

（学習院大学阿部家文書『温古録』一）

明和七（一七七〇）年十月
供廻りがさつ禁止触書

惣て召連候供廻之儀に付、去年九月相達候所、今以申付方不行届而々も有之哉、先挟箱持候者は勿論之儀、供廻りがさつ成も有之趣ニ相聞、如何ニ候、畢竟申付方未熟成故、右之通ニ可有之候、弥去年相達候通り、猶又召仕共も急度申付、途中其外門内外等心を附、供廻り随分取締、場取不申、がさつ雑言等無之様可被致候、

右之趣可被相触候、

（『御触書宝暦集成』一七八七）

白河藩阿部氏の幕末期の供連れ

御徒士　御徒目付　御鎗　御中小性　御供番　御中小性
御陸尺六人　御草履取　御挟箱
御徒士　御徒士　御乗物　御貸箱
場所目付　御長柄持　御挟箱
御徒士　御徒目付　御鎗　御中小性　御徒頭　御中小性

両挟持合　両役
口付　供若党　供草り取　供挟箱　○押
○押　御草履　番傘　御中小性　同　両掛三掛　合羽籠七荷
口付　供草り取　供挟箱　○押

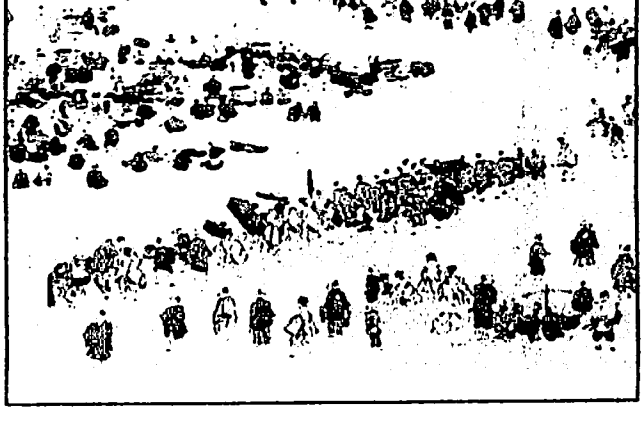
（阿部家文書『温古録』一）

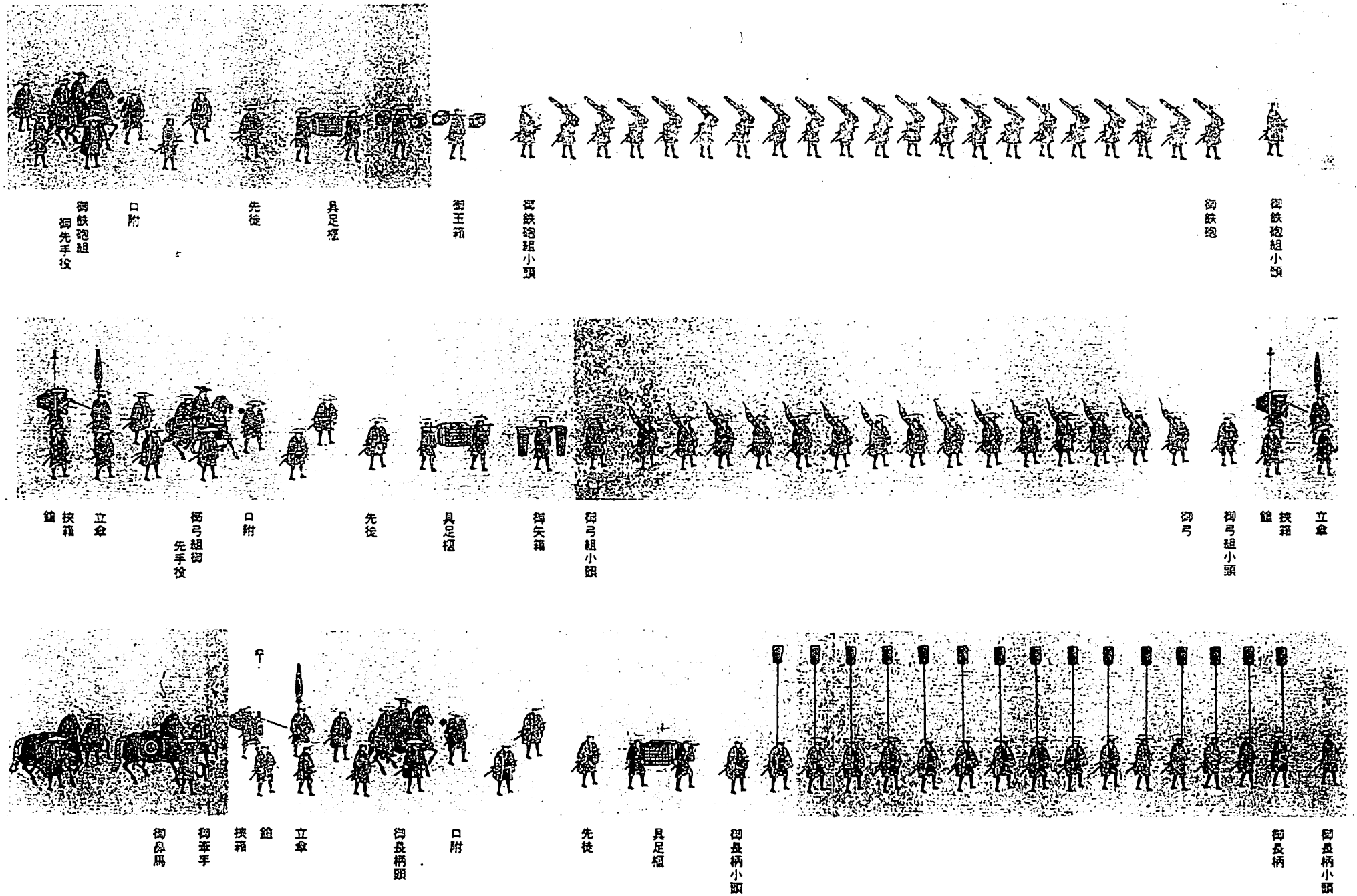
明和八年（一七七一）十二月
鑓持長柄傘など投渡し禁止触書

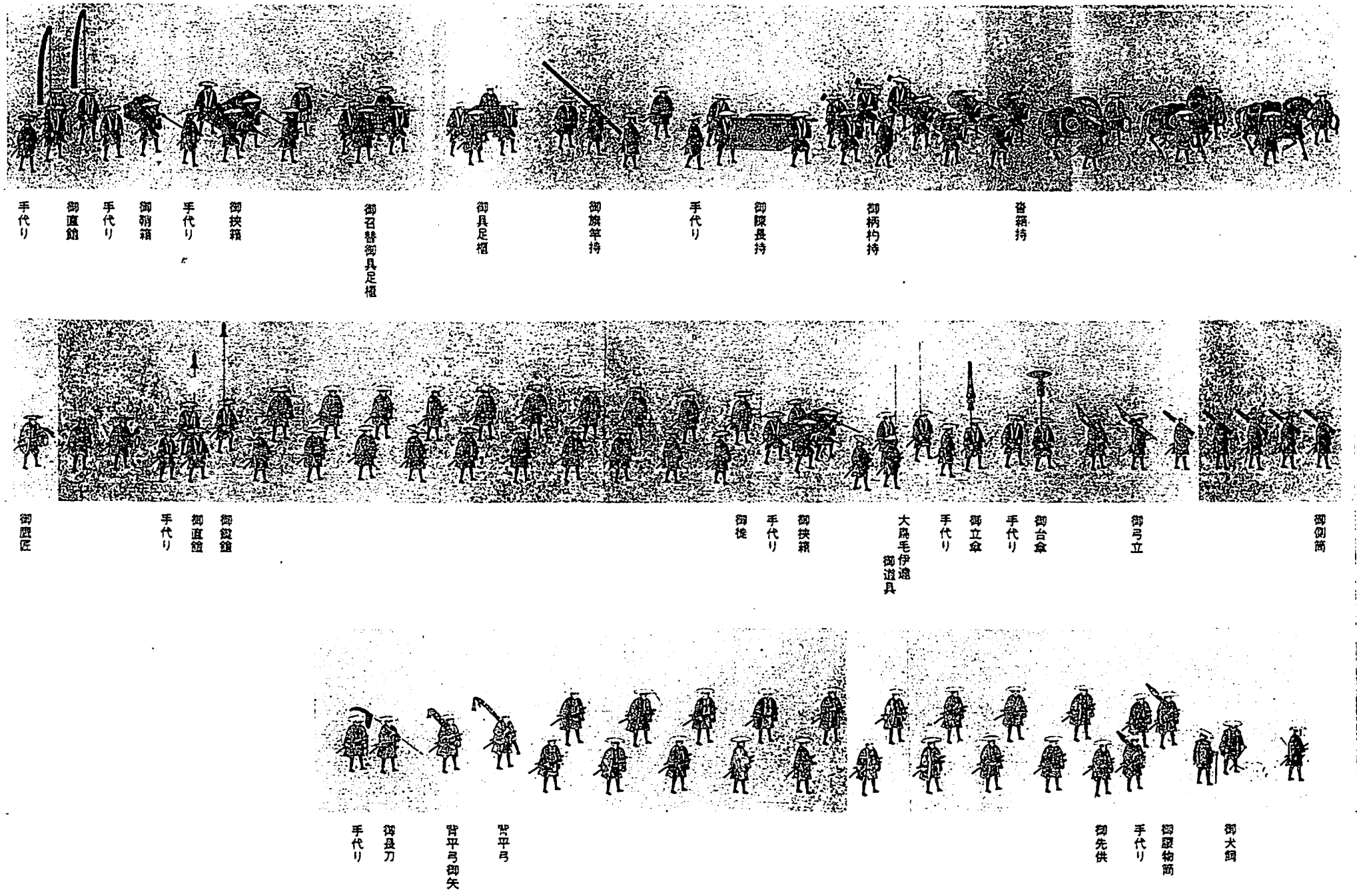
近頃途中ニて鎗持長柄之傘持代り合之節、手代り之者江渡し候時分、投候て相渡候、左候ては若怪我等にても出来可致哉、如何に付左様無之様寄々可相達候、

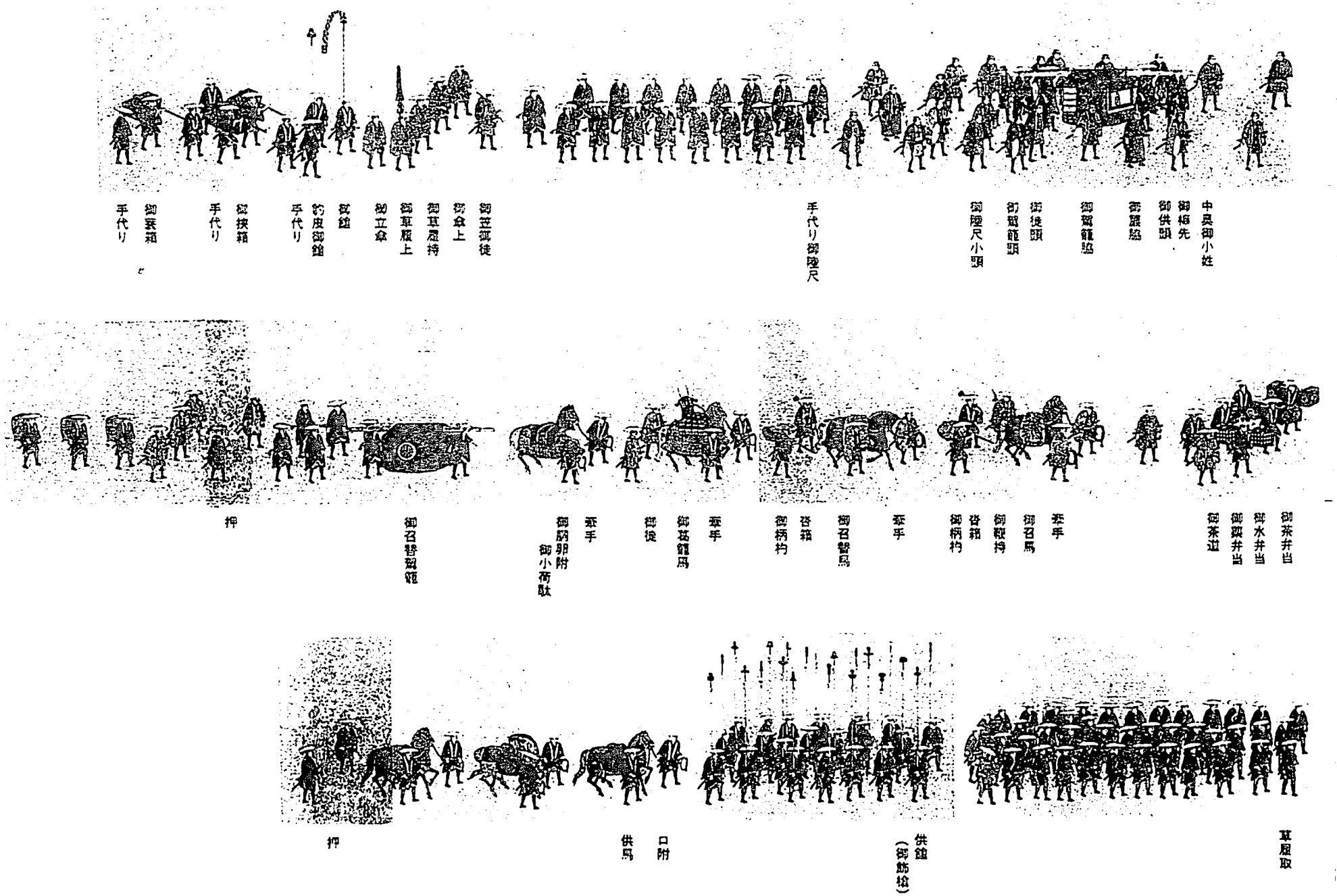
（『御触書天明集成』一七八八）

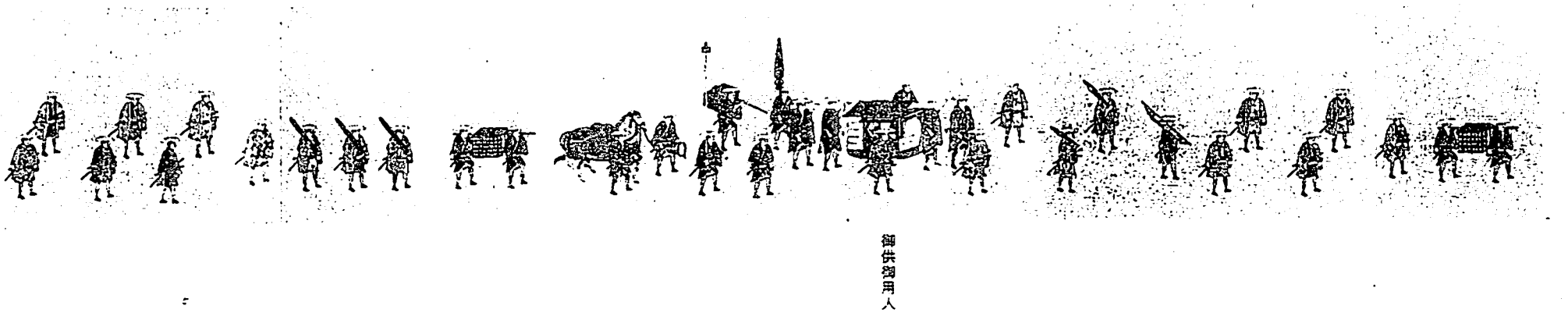
忍藩松平下総守の行列と転ぶ武家

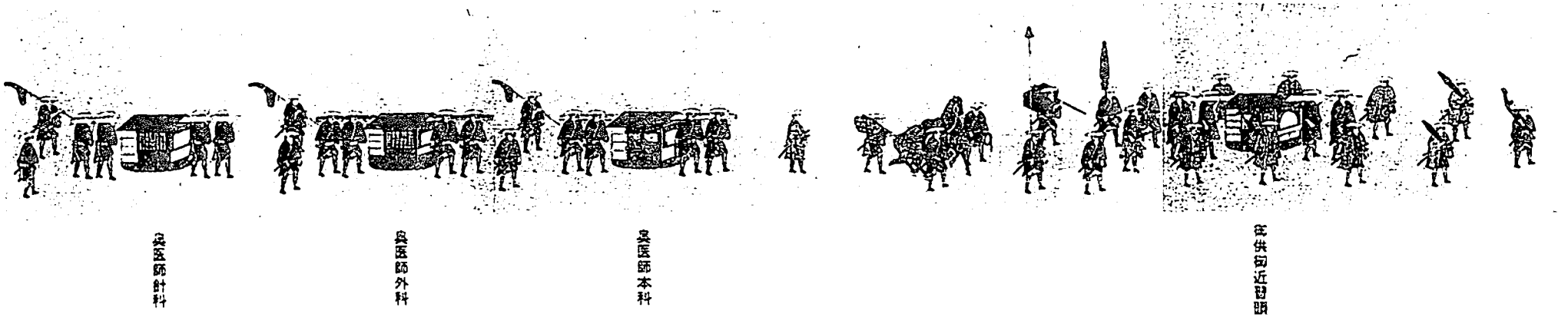


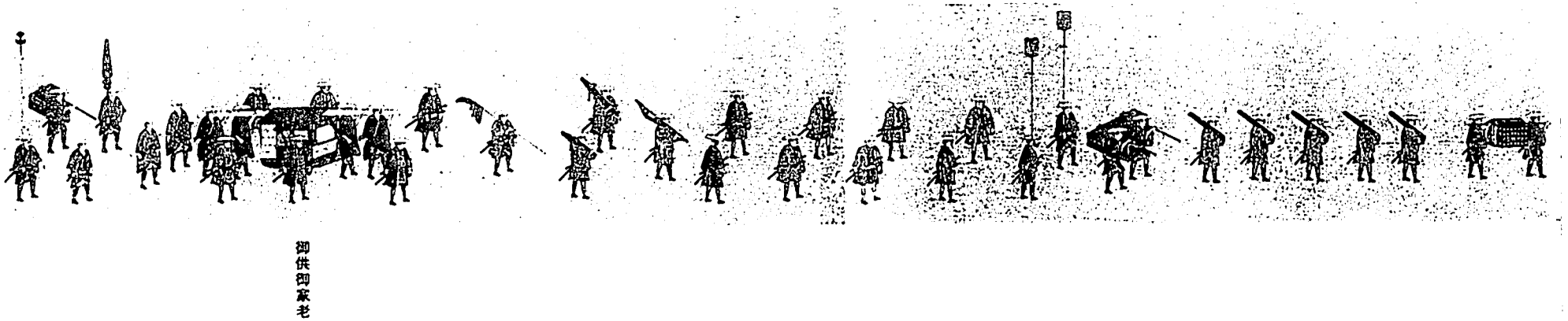

御鉄砲組小頭
御鉄砲
御鉄砲組小頭
御王箱
具足櫃
先徒
口附
御鉄砲組
御先手役
御弓組小頭
御弓
御弓組小頭
鎗
按箱
立傘
御矢箱
具足櫃
先徒
口附
御弓組御
先手役
御長柄小頭
御長柄
御長柄小頭
具足櫃
先徒
口附
御長柄頭
立傘
鎗
按箱
御奉手
御乗馬


手代り
御直館
手代り
御刎箱
手代り
御挟箱
御召替御具足櫃
御具足櫃
御旗竿持
手代り
御隙長持
御柄杓持
沓籍持
御側筒
御鉄鑓
御直館
手代り
御歴匠
御挟箱
手代り
御後
大扇毛伊遖
御道具
手代り
御立傘
手代り
御台傘
御弓立
御犬飼
御服物筒
手代り
御先供
御弁当刀
手代り
皆平弓御矢
皆平弓


御茶弁当
御水弁当
御硯弁当
御茶道
御召馬
御鞍持
唐櫃
御柄杓
御召替馬
御沓箱
御柄杓
御召替馬
御沓箱
御柄杓
御小荷駄
御鞍卸附
御鞍置馬
御従
御召替鞍
押
御装束箱
手代り
御挟箱
手代り
釣皮御鎧
手代り
御鎧
御立傘
御草履上
御草履持
御傘上
御笠御徒
手代り御陸尺
御陸尺小頭
御駕籠脇
御後頭
御駕籠頭
御供頭
御履脇
御梅先
中奥御小姓
草履取
供鎧
（御筋違）
口附
供馬
押


御供御用人


典医師針科
典医師外科
典医師本科
侍供御近習頭


御供御家老

御供騎馬
御供騎馬
御供騎馬

我国医師外科

我国医師針科